

FADO

54

Maio 2007

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDEKO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日...

ポルトガルギターの飯泉昌宏氏と共に、4月6日の深夜、定刻より1時間ほど遅れて、スイスチューリッヒ経由でリスボン空港に到着。空港は、やけに人でごった返している。それから1時間近く待たせられたら、コンペアーがグリーンと動き出し、預けた荷物が次から次へと勢いよく飛び出しては、コンペアーの上に並び始めた。

我が荷物 見つけ出したり それいけと ひっぱりだして 胸を張り
いざ、目指すは ファドの街

オレンジの 街のあかりに染まりつつ ファドとワインは セットに
してあり

ポルトガルの4月・リスボン滞在記

<クルベ・ド・ファド Clube do Fadoにて>

久しぶりのリスボンの春。紫、青、黄、白、赤、色とりどりの花が咲き乱れ、市電も道も公園も海岸も、町中が観光客であふれかえっている。

復活祭（ポルトガル語でpascoa）の最中だったのだ。十字架に架けられて処刑された3日後に、キリストは甦った。その復活祭が、今年は何と、お釈迦様の誕生日と同じ！4月8日（日）だった。何せ、宿はアルファマの大聖堂の向かいにある、そこからアルファマ、サンジョルジュ城へ向かう観光ルートにあるのだ。そして、9時近く陽の落ちる頃になると、宿の斜め向かいにあるファドレストラン「クルベ・ド・ファド」へ向かう客が、宿の下の狭い通りをカメラを片手に、通ってゆく。あまりもの騒々しさに3階の部屋の窓から数えてみると、何と50名を越す団体客が群れをなして、その店に吸い込まれてゆく。ファドも立派な観光資源なのだ。

私たちのように、飲むだけで客単価の低い客は、11時過ぎ、観光客が舌と胃と耳と（心も？）を満足させて帰った後にしか入れてもらえない。やっと入れて、2回ほど聴いたところで、客がひとり減り二人減り、私たちだけになったので退散しようとしたら、「ヒデコのために」と若手のファディスタ、シーラ・ダイレが三曲歌ってくれたこともあった。

アルファマを徘徊して宿に帰るには、必ずその店の前を通らなければならない。ある夜、かつてアマリア・ロドリゲスのバックを務めていたフォンテス・ロシャが、バーカウンターの隅にちょこんと腰掛け、相変わらずひとりぼつねんと煙草をふかしている姿が見えたので、あいさつに行くと、店のマネージャーが耳元でいわく、「もう中には客が2人いるだけだからね」と「帰れ」と言わんばかりの口調だ。

フォンテス・ロシャは、息子に家も財産も取られて、残されたのはポルトガルギターだけ、居場所もなく、毎晩、その店に来ているとのことだった。でも、淡々と演奏している姿からは、惨めさも哀しさも微塵もうかがえない。だって、彼がポルトガルギターを爪弾く時、音の精たちが彼の周りを飛び回っているのだから。

ポルトガルギターを茶目っ気たっぷりに弾きまわす時の彼の顔は、いたずら小僧のようだ。80歳を越えた人の指とは思えないほどきれいな指をしている。

<カーザ・メシコ Casa Mexicoにて>

今回も、何度かファドの店で歌う機会があったが、圧巻は、「メキシカンレストランで、日本人がポルトガルのファドを歌う」という突拍子もない企てだった。インターネットラジオ「Radio FADO de Portugal」で一日中ファドを流しているフェルナンド・ジル氏の仕かけたものだった。彼は、一日に20曲以上私のファドをかけてくれていたことがある。店内は、若いカップルで一杯だったが、ご当地ソング「リスボンのおいCheira a Lisboa」を歌ったときは、「Cheira bem!」「Cheira a Lis-

boa!」の合いの手が60人は超えているだろう客の口から突いて出てきて大合唱になったのには驚いた。ポルトガルギターは修理中だったので、飯泉氏がギターで伴奏してくれた。久しぶりに「暗いしけ」を日本語で歌った。コリアンダーの香に満ちたサルサソースやアボガドソースは、揚げタコスによく合ったし、テキーラ、マルガリータが程よく体中を巡り、店のオーナー氏のご自慢の赤ワインの大盤振る舞いで、翌日は二日酔い気味だった。

<ジュゼッペ・ヴェルディ Giuseppe Di Verdeにて>

20年前、「ピアノ・パール Piano Bar」という往年の歌手シモーン・オリヴェイラ司会のテレビ番組に出演した時、出会ったポルトガルギターのジョゼ・ブラカーナに再会した。今は亡き、カルロス・ゼロと初めて会ったのも、その番組でだった。彼はアソレス諸島のサン・ミゲルに住んでいて、時々、リスボンにポルトガルギターを弾きにやってくるらしい。ステージの合間に彼は、20年前と同じようにポルトガルギターを抱え私たちのテーブルに来るなり、「この歌だったね。あの時君が歌ったのは」と言って、「思い出のモーラリア」を弾きだした。あの頃と違うのは、私のキーが低くなったのと、彼の顔の半分を覆っていた真っ黒いひげが、真っ白になっていること。傍らで、25年来の私の親友、そしてブラカーナの大ファンのフェルナンダが目をつぶりうっとりした表情で聴き入っている。私の声にも力が入ってゆく。「ああ、モーラリア、大好きなファド歌いが私のすぐそばを通り過ぎていった。風のように。でも今でも、とぎれることなく私はその愛とともにある。」

アマリア・ロドリゲスが活躍する以前から、ファド界に君臨していた

ファド一筋に生きてきた

月田秀子の集大成とも言える貴重な映像の数々...

DVD「月田秀子ファドコンサート2006
ドキュメンタリー “生命の限りに”」

発売開始!

*ご希望の方は、同封の郵便振替用紙にてお申込みください。
*VHSテープをご希望の方は、ご相談ください。

価格：3500円

郵便振替：00990-6-18440 月田秀子ファド倶楽部



アルフレッド・マルセネイロの孫、ヴィトール・ドゥアルテ氏も、来ていて、祖父のことを書いた本をプレゼントしてくれた。15年ほど前だろうか、リスボン郊外の海辺の街カシュカイシュから車で15分ほど入った原っぱに突然、「アマリア」という赤いネオンを掲げたファドの家があり、ひとり訪ねて行って、歌ったことがある。彼とは、その時出合っている。あの頃の知性と自信にあふれた圧倒的な存在感が感じられない。こちらの人は老け込むのが早い。だからか、それともお世辞か、ポルトガルの友達は皆、開口一番に、「ヒデコは、変わらないね。」と言う。

隣のテーブルは、「エル・ファド EL FADO」（英語で言うとTHE FADO？）という「エル・タンゴ」を想起させ、なんとなく格好いいタイトルの本を最近スペインで出版した連中だった。彼らは、フランス語とスペイン語、ポルトガル語のメッセージとサイン入りの本を、この日本のファディスタにプレゼントしてくれた。

ひょっとしたらスペインでファドは小さなブームを起こしているのかもしれない。一昔前のスペイン人はこうやって肩をすくめたものだけだ。「ポルトガル人、いやだね、暗くて。彼らは地面しか見てないよ。」

<アルファマのファドレストラン “Taverna del Rei” にて>

いや復活祭で、どこのお店も超満員で入れない。一軒だけガラガラだったので、「ダメモトで」と飯泉氏と飛び込んだのが、「タベルナ・デル・レイ」。食事は済ませてあったので、飲み物だけを注文した。ポルト酒だったか、マデイラ酒だったか忘れた。私が歌ったことで、オーナーのマリア・ジョジョが、ごちそうしてくれることになった。

隣の初老の夫婦のスペイン語が聞こえてくる。が、かなりいい感じでノッテイル。歌の合間に、彼の仲間たちのコーラスが入る。それもポルトガル語で。バスク地方のビルバオから来たという。ジャズもタンゴもファドも大好きだという。そして、それらには庶民の心を歌うという共通点があるという。意気投合して、結果、彼らのリクエストに応じて「コインブラ」を歌うことになる。

客はバスク人で占められている。でも、のめりこみ方が半端じゃない。本当に心からファドが好きなたちはばかりだった。そうなるとうまい歌い手もどんでんヴォルテージを上げてゆく。よどんでいない、というか馴れ合っていないとでも言うか、ポルトガル人の客とは、一味違った「サウダーデ」が漂い始めた。

アンゴラ出身のアナ・マリアが壁にもたれるように目をつむり歌う「失った心」を聴いて、涙があふれた。彼女の黒い肌、媚のない、丸裸の自分に真摯に向き合うようなたたずまいに、今の自分が重くなった。「失ってしまった私の心よ、また見つけ出すことができるのだろうか？川の底に沈んでいるのか、海で溺れているのか？帰ることなく住ったまま、



月田秀子コンサート2006ドキュメンタリー “生命の限りに” 撮影手記

手崎信吾（映像作家・相生座主宰）

【11月1日記】自宅にて

前半45分、後編45分のドラマを撮影する。チャンスは大阪、東京、鹿児島、名古屋と4回ある。それに先駆けた月田さん宅でのリハーサル3日間、静岡県島田でのリハーサルとステージに参加することで心構えだけはできた。

【11月3日記】大阪「中之島公会堂」

800名を超える客席。やはり広い。カメラを置く位置を、客席から見て右側の舞台袖に決めた。出演者と同じステージ上でいつも斜め後から、月田さんを見つめることになる。観客の視点にこの位置はない。観客のためのスピーカーより後ろになるので、私の聴いている音も、観客が聴いている音ではない。

伴奏は、ポルトガルギターのカルロスさん、ギターの蓮見さん。二人はイスに座って動かない。月田さんは、自由に動く。照明は舞台全体のバランスを考えて設計されている。私がコントロールできるのは、画面の広さ（フレーム）だけ。それだけで舞台上で起こったことを、撮影を通して再構築できなければならぬ。

ファドが生まれる瞬間を撮影したい。

前半は月田さんを、後半はカルロスさんを見つめた。このカメラ位置では蓮見さんは背中だけ。

撮影した映像を見て、舞台照明の影響が強すぎると思った。肌の色が青色になるのは、嫌だった。一局の中で撮影意図とは関係なく肌の色がオレンジ色になったり青色になったりするの嫌だった。色をはずして明暗だけ（黒白）の映像にしてみた。この方が月田さんの感情に近いと思った。明暗の度合いが、白から黒までの灰色の映像になる。カラーがゆえの美しい場面は棄ててしまわない。一曲の初めから終わりまでが一つのシーン。それをカットなしで撮影する。

消え去ることができたら…。失くしてしまった私の心よ、今でも私は探しつづけている…」

<5月、東京「マヌエル」にて>

4月からポルトガルギターでファドライブのユニットに加わってくれた飯泉氏に向かって私は、しみじみと言った。

「あれから、一ヶ月しか経っていないんだよね。」4月の最初のライブは、はるか昔のことのような気がした。「そうだよなー。」飯泉さんも大きく頷いた。

4月6日から私は10日間、飯泉氏はさらに10日間、計20日間を、リスボンで過ごした。タンゴギター修行のためにアルゼンチンで3ヶ月ほど過ごしたことはあるという飯泉氏ではあるが、ポルトガルギターのレッスンに加えて、ギターのレッスン、初めて聴く本場のファドの歌、ギター、ポルトガルギター。流れ込んでくるポルトガル語の洪水。ぎゅうぎゅう詰りのファドの居酒屋。一寸塩辛いポルトガル料理。甘すぎるデザート。慣れない坂道だらけの道、暗い路地裏、店で突然弾かされたポルトガルギター、そしてギター。「マサ」、彼の名前は飯泉昌宏だが、ポルトガルでは、かなり言いにくいので、そう呼んでもらうことにした。（これは全く私の勝手な思い付きだ。ごめんね、飯泉さん）ポルトガル語で massa は「パスタ」、maçã はりんごを意味する。

「飯泉さん、本当に、お疲れ様でした！」

こんなにもファドを好きになってくれるギタリストに出会えたことは、私にとって何よりも喜びだ。ポルトガルで生まれたファドを、この東洋の地で演奏し、歌いつづけてゆくには、これからたくさんの障壁を越えてゆかなければならないだろう。でも、これからは、ひとりではない。飯泉さんの音楽性、感性と結びついた知恵をお借りしながら、一曲ずつ私達のファドを作ってゆこう。そして、聴いてくださる一人でも多くの方に、「生きていてよかった」と思っていたいただけるようなファドを歌っていたいと心から願っている。

<ファドに魅せられた青年「Taku」のこと>

彼の名前は「高柳卓也」。ファドに魅せられ延べ2年近くをリスボンで過ごしているという。彼の歌うファドは、現地仕込みだけあって、ファドの匂いがする。そして何よりも、「アルマ（魂）」がある！

バイロアルトからモーターリア、アルファマまで、毎晩のように歌い歩いているらしい。今回彼と一緒にいったお店には、必ず、「Taku」と言って挨拶をしにくる彼の仲間がいた。いつか、彼が日本へ帰ってきたら、一度、彼のファドを聴いてほしい。そんな機会を作りたいと思っている。今のところ、12月8日（土）東京・青山の「草月ホール」でのコンサートにお呼びできたらと思っている。お楽しみに。

【11月4日記】東京「ヤクルトホール」

撮影方針がはっきりしたので、より集中できる。カラーで撮影するが、色は気にしない。

カメラの位置を観客から見て左側の舞台袖にする。前半蓮見さん、後半月田さんを中心に撮影する。

蓮見さんの月田さんの歌声を聴きながら伴奏へ感情を込めていく姿、曲と曲の間に見せる表情が魅力。

少し落ち着いて、月田さんの動きを追えるようになった。

アンコール曲「竹田の子守唄」の蓮見さんの伴奏姿とても良い。

【11月7日記】鹿児島「みなみホール」

ステージ上のテーブルに置かれた赤いパラ輪がとても美しい。美しい赤。右側の舞台袖にカメラを置く。前後半とも月田さん中心。

ファドを初めてきくだろう観客に、ていねいにファドについて、これから歌う曲について説明する月田さん。じーっと月田さんを見つめて待つカルロスさん。月田さんの話が続く。待ちきれない様子のカルロスさん。そのカルロスさんの気迫が伝わってくる。

初めて、見えない観客の存在、月田さんの歌声に応える観客の息づかいが感じられた。三人の距離が近づいた気がした。インストゥルメンタル「コインブラのバラード」でカルロスさんの気迫にこたえる蓮見さんの背中。

月田さんの歌声と動きに、私も敏感に大胆に反応できるようになってきた。アンコール曲「竹田の子守唄」の終わった後、月田さんが舞台上から観客に挨拶している時に、もう一曲やるんだ、とすでに舞台の後に立っているカルロスさんが好きだ。

【11月9日記】名古屋「愛知芸術劇場小ホール」

舞台袖から出て、会場の2階の音響・照明スタッフのための狭い通路にカメラを置く。上から撮影しているという感じが出ないようにポジションと高さを工夫した。初めて観客席側から、観客と同じ音を聞きながら、通路がせまく身体の動きは窮屈だが、自分の心が感じるままにのびのびと撮影することができた。

DVD「月田秀子ドキュメンタリー 「生命の限りに」」特集

ファドがこんなにも変幻自在で、かつ根底的なところで決して何のものにも崩せぬ頑固さを持つ音楽家だということを、2006年の秋、2週間ほどのコンサートツアーで、初めて知った。

ポルトガルギターのカルロス・ゴンサルヴェスとのセッションは3度目だったが、今回はギターのレロ・ノゲイラの代わりに、蓮見昭夫がギターを弾いてくれた。カルロスが彼のリズム感を買った結果だ。

しかし、カルロスの身体の中から湧き出てくる本場のファドの「ノリ」は、私たち3人の間を疾風の如く吹きすぎ、音符もリズムも全てをなぎ倒された私に残されたのは、ただ、ファドへのひたむきな愛、過ぎた日々へのいとおしさ、悔恨、もう会えない人たちの無念の思い、聴き入ってくれている人たちへの感謝の思いだけだった。それにすぎるように、歌った。時々カルロスのポルトガルギターがそんな私を励ますように聴こえてきた。走り始めたら、つまづいてころびながらも、ひたすらゴールまで走りつづけるしかない。

そしてゴール、名古屋公演が終わり、私は、ビデオを撮影してくれた手崎氏にこう言ったらしい。「今回の公演はもう二度と振り返りたくない、全てを葬り去りたい」と。公演の1ヶ月ほど前だったのだろうか、氏の妻君（彼女は私が芝居をし

ていたころの後輩だった）から、今回の公演のビデオを撮らせてもらえないだろうか、交通費もなにもいらぬから、追いかけて欲しいとの嬉しい電話をもらった。そんな彼に対して、なんとという暴言をはいたのだろうか！私自身は覚えていないのだが……。 (当時の心身面での混乱状態から想像つかなくもないのだが)

やりきれない想いと闘いつつ、編集し終えたビデオを、「やっとながりました！」とあって、2月のマヌエルの最終ステージに携え駆けつけてくれた手崎氏の熱い想いに、その時の私はまだ気がついていなかった。

その夜、私は恐る恐るビデオの再生スイッチを押した。「月田秀子 命を賭けて ファドを歌う」静かに映し出されたタイトルのあとに「どんな声で」が始まった。哀しみをたたえながら必死に歌っているのは、確かに私自身だ。モノクロの画面一杯に映し出された私の横顔に、私は吸いつけられてしまった。

こんな表情で歌っている自分自身をはじめてみた。たしかにそこに映し出されているのは私自身。まぎれもなく私が、歌い、笑い、苦悩していた。

それは、まさしく、私の人生の宝物のように思えた。いままでも月田のコンサート活動を企画してくれた人たちに観てもらおうと思った。

DVD制作の手崎氏に了解を得て、近い人たちに観てもらった。すぐに感想が返ってきた。



<ドキュメンタリーDVDの感想>

其の壱 (K氏) : 「先日、手崎さんより昨年のツアーの様子を収めましたDVD-Rをごいねいにお送りいただきました。仕上げなければならぬ原稿がありましたため、まずはちょっと飛ばし見を…、と思ったのですが、最初からとても表情をとらえた映像で、思わずあの時の感動が甦り、一気に全部、見てしまいました。1台のカメラだけによるシンプルな作りが逆にいい雰囲気をかもし、とても引き込まれる映像で、あのリハーサルの時のこと、またおうかがいした名古屋でのことなど、いろいろと思い出してしまいました。改めてまた、じっくり拝見するつもりです。でも、酒でも飲みながら見たら涙が出てしまうかも… (苦笑)。」

其の弐 (T女史) : 「もしも、地震や嵐や火事があって、非難しなきゃならないとき、何よりもこのDVDだけは持ち出すよ。」

其の参 (I女史) : 「これは、絶対、ファンの人に観てもらわなきゃ。そのための協力は惜しまないから。」

其の四 (T氏) : 「会報1月号でギタリストの発掘を知って肩の荷がおりたような気がしていたところで、以前から欲しいと思っていた映像を、しかも貴重なドキュメントの形でDVDを観させていただきました。」

色彩の使用を極力抑えた陰影の美学が、月田秀子のファドの世界をさらに深いものになっています。」

Q嬢からのメール : 「DVD観たよ、早速。すごいね！ありゃラブレターならぬラブDVDだ。びっくりした。実がぎっしりつまっている。」

ライブがモノクロなもの、すごく効いてる。これを観ると改めて月田秀子の意気込みと、カルロスのすごさと、蓮見さんの奮闘を感じる。

特に「風の翼」のリハーサル風景でね、少しずつカルロスのリードでだんだん翼になっていく過程に感動しました。生ものっていか生きものっていか、そういう風に生まれ変わっていくさまがよくわかったよ。

ああやって少しずつ積み上げられていったんだろうなあと、ライブだけではわからない姿をちゃんと伝えられているのは貴重でした。

カルロスの力は絶大だ。月田秀子の歌が違うもの。でも決して自己陶醉にさせてない。完全に船頭さんだね。月田秀子の声も体んなかにうなりがあって、それが広がっていくような感じ。蓮見さんにも貴重な経験だったでしょう。ほんとにリズムの取り方はフォークと著なみに違うもんね。

あのコンサートをやったからこそ、ポルトガルギターで、っていう思いがさらに月田秀子のなかで強くなって、その思いが今年になって通じたんじゃないかな。

以上あつという間に観させていただきました！ありがとうございます。」

<ひとりでも多くの人たちに…>

早速、手崎氏に会い、私自身の感想と、これらの人たちの感想を伝えて、今回ビデオを撮影した際にかかった旅費だけでも受け取って欲しいと手崎氏に申し入れたところ、目から鱗…のこの一言！

「月田さん、もしそんなお金があるのだったら、それでもってひとりでも多くの人たちに観てもらおうことを考えてください。それが、僕のただ一つのお願いです。」

月田にとってだけではなく、ファンの皆様にとっても、月田秀子の集大成として、永久保存盤のひとつに、是が非でもお加え下さいませよう。

月田秀子

informação

●カウド ヴェルデからのお知らせ

「カウド ヴェルデがファド通信にファドの歌詞の訳を載せるようになってから、今年で十年になります。楽しくさせて頂いておりましたが、最近、メンバーの中に体調不良の人が出ましたので、しばらくお休みさせて頂きます。長い間ご愛読頂きまして真に有難うございました。」

●ポルトガルアートセンターからのお知らせ

ポルトガルを愛し、日本の友を愛してやまないクリスティーナ・ゴメス女史が、かなり大掛かりな「ポルトガルフェア2007」を開催されます。どうか、皆様お誘い合わせの上、ご来場くださいますようお願いいたします。詳細は、パンフレットをご参照ください。

開催場所：代官山ヒルサイドテラス アネックスA棟

開催日：2007年6月11日(月)～20日(水) 10：00～19：00 (最終日：15：00)

<月田秀子のスケジュール>

5月 7日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18：00 ライブ：20：30～(約1時間)	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125 料金：6,000円 (ディナー・ライブチャージ込み)
8日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
9日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.43」 開場：18：00 ①20：30 ②21：30 ③22：30	ライブチャージ：2,500円 (入れ替えなし)
19日(土)	栃木・足利「なんぶう南国食堂」 ①開場：17：00 開演：18：00 ②開場：20：00 開演：21：00	予約・問合せ：tel / 0284-44-4377 料金：3,150円 (食事・ドリンク付) *入れ替え制
26日(土)	神奈川・大船「パラッツォヴィオラ」 ディナー：18:00～19:00 ショータイム：19:10～	予約・問合せ：tel / 046-744-4005 料金：8,000円 (ディナー・フリードリンク)
6月 4日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約 開場：18：00 ライブ：20：30～(約1時間)	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125 料金：6,000円 (ディナー・ライブチャージ込み)
5日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
6日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.44」 開場：18：00 ①20：30 ②21：30 ③22：30	ライブチャージ：2,500円 (入れ替えなし)
12日(火)	大阪・南方「三裕の館」 *要予約 ステージ：①20：00 ②21：00	予約・問合せ：tel / 06-6304-1745 料金：5,000円 (ワイン・オードブル付)
13日(水)	神戸・三宮「あいり」 *要予約 開場：18：00 開演：19：00	予約・問合せ：tel / 078-241-1898 料金：5,000円 (料理・ドリンク付)
14日(木)	山口・下松「華のうつわ」 開場：18：30 開演：19：00	予約・問合せ：tel / 0833-46-2237 会費：3,500円 (1ドリンク付)
15日(金)	愛媛・松山「MOON GROW (ムーングロウ)」 開場：18：30 開演：19：00	予約・問合せ：tel / 089-941-8188 チケット：5,500円 (1ドリンク付)
16日(土)	広島「カフェ・テアトル・アビエルト」 開場：18：00 開演：19：00	予約・問合せ：0828-73-6068 前売3,500円 当日4,000円 (1ドリンク付)
17日(日)	大阪・大正「アゼリアホール」“ざまぐれライブVol.10” 開場：13：00 開演：14：00	予約・問合せ：tel / 06-6552-9713 チケット：5,000円 (飲食付) 全席指定
7月 3日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
4日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.45」	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125
9日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125
8月 6日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125
7日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
8日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.46」	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
9月 3日(月)	東京・渋谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5738-0125
4日(火)	東京・四谷「マヌエル」 *要予約	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
5日(水)	「NOITE DE SAUDADE Vol.47」	予約・問合せ：tel / 03-5276-2432
22日(土)～24日(月・祝)	宮城・松島「円通院・観月の宴」	予約・問合せ：tel / 022-353-2626
30日(日)	山梨・甲府	詳細未定

<編集後記>

体調が思わしくなく、パソコンを開ける気力さえもない日が続いた。負けん気と意地で突っ走っていた私の人生では考えられないことだった。会報の原稿を書かなければと、気がかりが焦る。それが又よくないらしい。またもや、弱気の月田の醜態さらすような会報でごめんさい。これが精一杯の月田です。ご感想や投稿お待ちしております。

我が友の 病にあれば われもまた 半分萎えて また日が昇る (月田)

月田秀子ファド倶楽部ホームページ

<http://www.fado.jp/>

- 月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第54号
- 2007年5月20日発行(季刊：年4回発行)
- 編集・発行「月田秀子ファド倶楽部」事務局
- 〒140-0014 東京都品川区大井7-14-2-301
- TEL&FAX 03-3776-6238